

ています。それは「生きていく宗教のように思います」、と日本人の宗教性に感想を持ち、人が訪ねそうにない小さな神社の参拝者に「しかも平日に」(ミュンスター)と驚く学生もいる。宗教的な生活が特別なものとして分別され、そして世俗的な生活に個人的にも公共的にも関わってくるドイツの事情に対して、日本におけるそれが異なることを指摘するものであろう。宗教が公共と一体に問われることには一方で難しい問題も孕まれている。スイスやドイツでのモスク建設は大きな論争を巻き起こし、イスラームの公立校における宗教教育はノルトライン・ヴェストファーレン州で開始されたばかりである。

宗教の多様性と寛容性に関して、ヨーロッパでは、一方で「宗教と信仰の問題はいつそう個人の領域の問題となってきた」(ニュルンベルグ)、「個人家でヨガやテゼの集会」(ミュンスター)などと、日常の儀礼を行うことで人生に新たな意味合いを求める傾向があること、「クリスマススキリスト教 *Weihnachtschristentum*」で年に一度だけ伝統を確認する傾向があることなどを指摘する学生もいる。いずれも宗教すなわち一つの教団、そしてその一つの教義への信仰という地点からは距離をおいた動きがあり、寛容や対立の主体である宗教そのものの求められ方に変化があることを指摘するものだろう。他方、過去現在の宗教対立(教団対立)を上げる学生は多い。その彼らに、日本の宗教は総じて寛容なものと映るが、ヨーロッパにおける神学や教団レベルで問われる宗教の「寛容性」を標準として、日本の宗教の寛容性を問うことには注意深い検討が必要であらう。

寺院の役割と日本人の宗教性

長岡 岳澄

本研究の目的は、第九回宗勢基本調査の結果から、寺院関係者において現代社会における寺院の役割がどのように捉えられているかを明らかにし、また、寺院の役割と日本人の宗教性の関係について考察していくことにある。

宗勢基本調査とは、浄土真宗本願寺派において実施されている調査であり、各寺院の現状や寺院関係者(住職・坊守)の意識、門徒の意識について、主に質問紙法を用いて調査されており、本願寺派寺院の実態を把握するための基礎資料といえる。一九五九年に調査が開始されて以来、約五年ごとに実施され、二〇〇九年に第九回目の調査が実施されている。

第九回宗勢基本調査は、本願寺派の一般寺院及び教会すべて(一〇二八〇ヶ寺)を調査対象とし、各寺院に調査票(寺院票・住職票・坊守票・門徒票の四票)を送付した後、回収している。回収率は五九・六%(六二二六ヶ寺)で、四票揃っている五七五八ヶ寺分が分析対象となっている。なお、住職は、平均年齢六〇・三歳、男性九六・五%、女性三・五%、坊守は、平均年齢五九・四歳、男性〇・四%、女性九九・六%、門徒は平均年齢七一・七歳、男性九〇・四%、女性九・六%となっている。

本研究においては、この第九回宗勢基本調査の結果の中から、本研究の目的に関連すると思われる項目について検討していく。

まず、寺院の住職自身が「住職の仕事」として何を重要であると思っているかを尋ねている項目の結果を見ると、「寺院の

法要・儀式の執行」が八〇・五%と最も高く、次いで「教えを伝えること」五五・四%、「在家での法要・儀式」四六・七%となっている。この結果からは、各寺院の住職においては、法務が最も重要であると考えられていることが窺える。また、住職が門信徒から受ける相談について尋ねている項目の結果を見ると、「葬儀・お墓」が七二・〇%と最も高く、次いで「法要・年回」六一・五%、「真宗作法」四三・六%となっている。この結果からは、門信徒が最も関心があることも仏事・法務に関するものであることが窺える。これらの結果から、現代における寺院の役割としては、法務に関することが最も重要なこととして捉えられていることが分かる。背景としては、亡くなった人への思いなどがあると考えられるが、寺院の日々の法務が日本人の宗教性の一端を担っているのではなからうか。

しかし、「住職の仕事」として「教えを伝えること」が二番目、門信徒からの相談として「真宗の教え」が五番目に高くなっていることから、仏事・法務のみということではないと考えられる。宗門(浄土真宗本願寺派)に期待することは何であるかを尋ねている項目の結果では、「人々の苦悩にこたえる教団であってほしい」が五六・四%と最も高く、次いで「現代に対応する教学を確立した教団であってほしい」四〇・一%となっており、仏事・法務に関する「法要・儀式がさかんな教団であってほしい」は三三・三%、「葬儀・法事を重視する教団であってほしい」は二二・五%と低くなっている。この結果からは、仏事・法務は重視されず、現代社会の問題に対応する、その為の教えを確立していくことが重視されている。

法務と教義は密接に関係しており切り離せるものではないが、寺院関係者において、寺院の役割としては法務を行っていくことが第一であると捉えられているが、一方で、それだけでは充分とはいえず、現代社会の問題に対応する教えが期待されるという葛藤が現状としてあることが窺える。

ビハーラ活動と日本人の宗教性

伊東 秀章

世界的に展開されたホスピス運動に触発され、日本仏教はビハーラ活動を展開している。ビハーラ活動では、生死の問題についての応答が問題の一つとして取り上げられる。本研究は、ビハーラ活動者と大学生の生死の問題への応答をアンケートから明らかにする。両者の相違を明らかにすることにより、日本人の宗教性を明らかにすることを目的とする。

対象は、浄土真宗本願寺派のビハーラ活動者養成研修会の参加者三九名と、大学生一一九名である。本研究のデータは、養成研修会の研修の一部として行ったものと、大学の講義時にアンケート調査したものである。また、大学生のうち宗教関係者は除いた。

設問は、余命三ヶ月と告げられたガン患者から問われた状況を設定して問われた。今回分析したのは、「先生、死んだら私はどうなるのですか、私不安なんです(教えてください。)」という問いに対する応答である。この問いに自由記述式で回答を求めた。

結果、ビハーラ活動者の回答で固有のものは、「浄土真宗的